

以王

LEON- TODO

N-ro 10



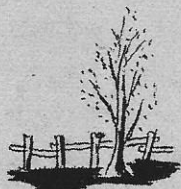
AUGUSTO-
SEPTEMBRO

1954

ENHAVO

| | | |
|--|----------------------|----|
| PRIAMO AL PATRUJO | N. ASAHIGA | 1 |
| MOZART KAJ BEETHOVEN | H. BONTARO | 9 |
| UMOREBI (REMEMOROJ) | H. AIZAW | 14 |
| ESPERANTO KAJ KATAKANAO | ARIMA YOSIHARU | 17 |
| PRI LA ESTONTECO DE JAPANA FILOZOFIO (Traduko) | N. HAJAKAWA | 23 |
| PRI KORESPONDADO aldono: Traduko d. KAGUSA-HIME | TTAKAHASI | 25 |
| MEMBRO-LISTO DE SAPPORO-ESP-SOCIETO | | |
| ANONCO DE LA 18-a HOKKAIDO-ESP-KONGRESO | | 32 |

我々が
投げ出し
問題は二
提起され
はとつて
忍長い間
1.
「門出の
かし今
に。凡
の心の
心の暮
始まつ
心はら
碎。遠
により
自尊心
四六年
大き
国奴と
」(註
とした
故に愛
単なる
につい
南原
尊皇
在、愛
ての国
封建性
一目
して



— 愛 国 心 について —

朝 比 眞 昇

我々が戦時中その名の故に再び未始青春を捧げ、各国の多くの人達がその名の故に命を
投げ出した愛国心というものの本質は何であるか。敗戦以来一つと私が悩まされて来た
問題はこれであつたし、最近予備隊の発生と再軍備が企図されて必然的に愛国心の課題が
提起され、青年達も思考を強要されているに違いないのもこの問題であるかと信ずる。私
にとつては、更に国際語エスペラントの問題と結びついて半ば義務的な課題となり、現在
迄長い間これを探究して来たので、今回その結果を公にして諸兄弟の参考に供したいと思ふ。

「内出の前夜“私を未亡人にしてはいや、といつたきみの顔が目に忘れられない……。し
かし今さびしい戦いに純粋な国家への思いを盛つた征伐へのおあづけだ。生死の運命と共に。
凡情とたたかい愛国の心にと清められた我が心はここまで高められて来たのだ。柳々
の心の苦しみとたたかい結局心を欺瞞したのだらうが。否、そう思いたくはない。一切の
心の葛藤に打ち克ち素直に愛国の誠だと考えたい」(註1) 戦争の正否を別として、すでに
始まつた以上は取捨られないというのが多くの人の偽わらぬ感情であつた。が単なる愛国
心なら敵も有するものであり、日本人には忠君愛国でなければならぬとされてき、一徳玉
砕、淺川精神が強制された。降伏の唯一の条件が国体の護持ではあつたが、未曾有の敗戦
により、天皇崇拜は崩れ、精神の緊張がゆるみ、国民道徳は地に陥ち、自己卑下が国民的
自尊心にとつて代り、もはやどんな意味においても愛国心らしきものは見られなくなつた。
四六年一月野坂参三が延安から歸つて勿死、その第一声こそこの存亡混乱の日本に与えら
れた大きな衝撃に他ならなかつた。ファシストどもはこれまで共産主義者を非国民と呼び、売
国奴と罵つた。しかし共産主義者こそ、眞にその民族を愛し、その国を愛するものである。
」(註2) と。国民は初めて愛国心が多く解釈と共に存在するという事実を知つてガク然
とした。更に、従来の無意識的に固定されて来た愛国の概念に動搖が生じたのであつた。
故に愛国に就ての論議は四六年から七年にかけてジャーナリズムをにきわたしたが各見解の
単なるラ列に止つて、問題は掘り下げられなかつた。田中美知太郎、出陣は夫、「愛国心
について」の中でソクラテスを論じて現実を、哲学上の古例を引いて綱塗しようと試みた。
南原繁も紀元節の演説で、無名の戦争にかり立てた愛国心とは異なる「祖国愛」を提唱した。
尊皇攘夷とか忠君愛国とかの非近代的愛国心はさておき、国際間の紛争を戦で解決する現
在、愛国心なしには国家が戦争を遂行し得ないから、近代諸国家にとつて共通な前提とし
ての国家至上観がこの場合の問題であり、近代国家自体の封建性が日本の愛国心における
封建性の基礎となつてゐることが重要である。

戦争の国体論
不平等の
国体。

一旦下火になつた論議は四九年九月再び安倍能成によつて口火を切られた。彼は概念と
してではなく現実の愛国の問題として愛国を取り上げた。松村一人は「愛国によつて何が

実際に主張されているかを注目せねばならず、富裕階級と貧困階級と何れの利害が愛国の主張に肉連しているかが大切である」と説き、磯田進は「愛国は階級の利益によつて分裂している。そしてその一方の階級が人口の大多数を占めている」と主張した。淡徳三郎もフランスから帰るや続々と著書を公にして祖国を愛する道を説いた。乙札玄の稱もすれば概念的な諸説は高島善哉が「新しい愛国心」(註3)を著し、又清水幾太郎が「愛国心」(註4)を出すことによつて一応の終止符を打たれた。前者は冷徹な社会科学者の眼で愛国心を分析して「プロレタリア階級の愛国心こそは現代の愛国心である」という結論に達した。愛国心は常に史的、階級的なものであり、従つて過去の戦争における愛国心の本質も亦史的理論的に解析されるべきだとしたところに科学性が発見される。これに反して他の一面、社会心理学的に愛国心を求めたものが後者であつた。彼は愛国者としての最低の条件をも示した。1. 同胞への素直な愛情、2. 寛容の精神、3. 戦争との絶縁、4. 民族国家から世界国家への史的洞察、5. 志士の悲壯感からの絶縁、が即ちそれである。彼は階級性を殆ど否定していること、平和と民主主義に結びつけていること等が注目される。五十年八月に予備隊が生れるとシマーナリズムは再び愛国心を問題にした。そして、「君が代・日の丸・修身——国民実践要項」と連る天野方式が現れ、「静かなる愛国心」、芦田の「愛国の表情」、共産党の「民族戦線」等が市場に溢れた。柳田謙十郎、久野収、難波田春夫、横田喜三郎、戸沢鉄彦、船山信一、京口元吉、田中惣五郎、向坂逸郎、高桑純夫、千葉雄次郎、島芳夫、川島武室、金森徳次郎、高瀬莊太郎、小泉信三、飯島幡可、カミユ、山本新、大内一男、正木正、菊池謙一、正木ひろし、大熊信行等が講和を廻つての論争と共にこの時期に愛国心を販上げてゐる。そして今、講和が既に結ばれて我々の進むレールが示されてしまつた現在、現実の問題として愛国の問題が再び国民の上に現れて来つてゐる。

2.

愛国心とは何か。それを考える際に予め注意しなければならぬのは自明の事ながらそれが愛国主義とは明白に異なるものだという点である。(高島も指摘している如く(註5))それは且つて屢々混同されたし、すりかえられて来たからである。)清水は彼の定義として、「愛国心とは、自分の国家を愛し、その発展を願ひ、これに奉仕しようとする態度である」(註6)としているが、淡の言及(註7)をまつまでもなく、清水にあつては国家と民族と国土とを混然としているという点で、亦国家を静的なものとして(註8)観察している点で到底受入れ難いものである。出・古在(註4)は愛国心を次の様に述べている。(註10)「自分の居る国土、同胞、その文化にたいするきわめて深い愛情」これも或程度アマイな点を含んでいる。それは清水に対しても云える事であるが、民族を単なる精神的結合体と考えるか、或は特定の物質的土台の上に成立した精神的結合体と考えるかという点である。前者では自民族の文化を守ることが大切になるが、後者では文化的独立を可能ならしめる物質的土台、すなわち領土的経済的独立も亦関心事となるからである。更に民族がこの土台に経済生活の基に立つて考えられる時自ら階級の問題が浮び上つて来る。そして階級

的利益を離れた
生と成立に伴
はこのブルジョ
この国家に奉
るブルジョア
利益の為に自
するにいたる
発展を阻害し
内に実質的な
ことに、じつ
大衆的、庶民
而も警察力と
るに於いて、
なければなら
当分のものは
びつがすに
である。(註
なく、デモ
体力となる
には体制や
(註12)も
で掘起する
る
愛国心の
脱の問題も
解し得ると
とは未だ充
の立場にほ
に支へられ
そして一つ
チャンス在
うが、「日
根本的同一
根の欠如は
立場の理解
には彼に及

的利益を離れた総合的な愛国心などは存在しないことが明かになる。「資本主義社会の発生と成立に伴い民族国家が形成せられ、ブルジョア民族主義があらわれた。かくて愛国心はこのブルジョアの支配する国家に対する奉仕ということに移しかえられた。ところが、この国家に奉仕し防衛し、強化するということは、ただ単に大衆が、愛する祖国に君臨するブルジョアジーという少数者の利益をはかることにすぎない。ブルジョアジーは自己の利益の為に自国の大衆を抑圧し隷属させるばかりでなく、進んで他民族をも侵略し奴隷化するにいたる。……侵略戦争によつて祖国を危険に陥れ、自国大衆を奴隷化し、文化の発展を阻害し、更に他民族を隷属させるのとは反対に、国際間に友愛のきづねを結び自国内に實質的な自由と平等とを實現して、一切の抑圧を廃棄すること、この事業を實現すること、じつに愛国心の發揮も亦する」(註10)「従来生産力を担当して来た階級がもはや大衆的・庶民的基礎をもたなくなり、次第に支配階級としての不勞的寄生的な階級に陥り、而も警察力と軍事力とのみによつて已れの既得利益と伝統秩序とを護ろうとするようになるに於て、眞の愛国心は資本主義の擁護者の許を去つてその批判者、その反対者の掲げなければならぬ旗幟になる。愛国心はここで再び大衆的な基礎を持ち、生産力の眞の担当者のもことになる。そしてこの場合のみ、愛国心は、軍国主義のエキスパンションと結びつがすに、平和と反戦へのやみがたいヒューマニズム的心情と結びつくことが出来るのである。(註11)「向題の核心は愛国心をファシズムと全体主義への心的動力とするのではなく、デモクラシーの主体的な力にまで育成することには存している。新しい民主主義の主体力となるものは勤労者階級の階級的な自覚以外にはあり得ない。新しい愛国心の育成には体制や民族の意識の外に階級意識の決定的な役割を無視することができないのである」(註12)もちろん我々は愛国心も社会向題の一つである故にそれを一定の歴史のワクの中で掘起することを必要としていることを忘れてはならない。

る

愛国心のムジュンすなわち愛国心に伴う排外主義への逸脱とコスモポリタニズムへの逸脱の向題も亦我々にとつて甚だ重要な向題である。愛国心が民族主義に連るのは前節で理解し得るとしても、愛国心とインターナショナルイズムの繋りを如何に理解するかということとは未だ充分でないように思はれる。清水はこの点に就いて「世界の立場というのは個人の立場にほかならぬ。一切の集團から自己を解放し盡した人間の性質や願望によつて直接に支へられるのが世界の立場である。個人と世界とは大小無数の集團を飛び越えて結合し、そして一つのものとなる。……世界の発見を通じて愛国心は偏狹で残忍な性質を棄て去るチャンスを与えられる」。(註13)といつているが、何と云ふよりない虹の楕円形のものであるが、「日本人の向には世界市民の立場が皆無であつた。人間という存在の理解、人間の根本的同一性の承認こそ、人種や國境を越えた世界的結合をなすものであるが、かかる前提の欠如はコスモポリタニズムを不可能にする」(註14)かくて清水に於ては個人の立場の理解を伴ふ愛国心は必ず対外的イントレランスに昇華する。そして一層懸いことには彼に於てはコスモポリタニズムが究極の理想であることである。コスモポリタニズ

ムは明らかにインターナショナルイズムと異質のものであり、「諸国家・諸民族を一つの統一体にまとめ、全人類を同胞とみる見解」(註15)「各民族、各国家の差別を越えて統一があると考える立場。これに反して国際主義は各民族、各国家の差別を解消して世界全体としての大きな組織のうちに入れようと主張するもの」(註16)「コスモポリタニズムとは、国家とか、国民とか、国境とかいう要素を抜きにし、直接に個人を基礎として、他民族や他国家の利益や発達をも尊重し、個人を人類の一員として考え、その共同生活の地盤として世界を眺め、この地盤の上に個人の共同生活を個人の協力によりて維持し発達させようとする。インターナショナルイズムは国家とか、国民とか、国境とかいう要素に重きをおき、これらのものの上に他の利益と発達を考へるのである。個人が集つて国家を形成し、この国家が非常に強固な団体であるということを重要視して、諸国家の共同生活を諸国家の協力によりて維持し、発達させようとする。これは人類が色々な人種や民族から成つていて、それぞれ特殊な性格、歴史、文化を有するから別々に国家を形成し、特色のある固有の発達を遂げると共に、それ等の協力によつて、全体としての調和のある発達を計ることが最も望ましいという考えに立つものである。(註17)「ブルジョア的文献において、国際主義とコスモポリタニズムが同意語として用いられているが、階級を知らず、ただ民族と個人しか知らぬブルジョア思想家においては、問題の理解はこれ以外にはありえない。われわれにとって必要なのは、民族の問題をも、一民族内の階級対立および民族の幸福な未来を想う諸階級という根本見地を忘れず、また諸民族の平等、友誼の關係がいかに各民族の大多数をしめる人民の利益にねざしているかを理解することである。ここには、国際主義はコスモポリタニズムと共通のなにもものをも持っていないのである。」(註18)「インターナショナル(国際的)というのは、コスモポリティカル(世界主義的)ということではないのです。インターナショナルマン(国際的な人間)というのは日本の国籍や、日本民族の立場を忘れて、全くコスモポリタン(世界主義者)になつたということではないのです。今日、ユダヤ人はコスモポリタンです。祖国をもたない。然しインターナショナルな人間というのは祖国をもつ。祖国のためには自分を犠牲にすることのできる人間のことです。今日、日本でインターナショナルというといわゆる祖国をもたない、というものに置換えられる危険があると思うのです。つまり日本民族の立場を忘れて、全くどこの国の奴隷になつてしまふ。身も魂も売り渡してしまふ。そういうふうには考へられている場合が少なくない。国際的というのは国民相互の關係をしつかりと認識するということである。だからして体制というような、インターナショナルな観点は民族というような国民的な見方と実は離れたものではない。コスモポリタンには、体制も民族もなく、ただ自分個人があるだけです」(註19)「かつて日本を訪れたソ連の作家ゴルバートフが奥にうまいことを云つていた。インターナショナルとは、自分の周囲をよくしていき、世界中の人々の握手によつて、このような努力を結集し、世界をよくしてゆくことだ。これに反してコスモポリタンは、ベニスのがよといつてはベニスに行き、ブルゴーニュの酒がよいといつてはブルゴーニュに行き、といつた工合に、よい所を追い求めて渡り歩くものだ」と

いわけで
いて横田は
の利益と発
ての国の利
う。眞の愛
ただ重点を
えであり現
きでねば
と、愛国心
える。けれ
とは何れ
いてア
でないとい
なもの
体が血液
族主義の
因として
族主義の
義と国際
国家の成
の如く近
であつた
の方向を
が起つて
主義は国
ポリタニ
家の成立
れを担
の内部で
が始まる
のでは
国際主義
し出し
する。日
国際主
主義に

いわけである……』(註20)とみるべきであろう。国際主義と愛国主義との関係について横田は「愛国とは結局において国の利益を計り発達を計ることである。単に自国のみの利益と発達を計り他国のそれを無視することは反つて自国のそれも実現出来ぬ。すべての国の利益と発達が進められ、その結果として自然に自国のそれも進められるのである。眞の愛国はこの様に国際主義と面立するものであつて寧ろ両者は實質において一致し、ただ重点をおく方面が異つてゐるに過ぎない」。(註21)としているが、これは皮相の考へであり現実無視の空想論に過ぎず、我々はもつと異つた方面からこの問題をとらえるべきであらうが、高島はこの点に関して「民族とか民族主義とかいう表現は、一見すると、愛国心というよりはもつと客観的な、もつと筋合の通つたものを含んでいるように見える。けれども民族的感情は愛国心に比べてどれ丈不透明さが少いであろうか、民族主義とは何か、それはデモクラシーや国際主義といかにして結びつき得るのか、民族主義においてファシズムとデモクラシーを分つものは何にか、民族主義の意味内容が複雑で一義的でないということからきている。民族は、現実に歴史の上に現れた姿においては、自然的なものを担い手として、形成される人間の歴史的社会的關係にほかならない。即ち文化共同体が血液共同体をその担い手としてはじめに現実的な共同体として民族があらわれる。民族主義の主張なり運動なりは時に近代的なものであるが、民族主義が近代化への力強い要因として、積極的な意義をもつようになるのは、国内的統一の運動としてであつた。民族主義の確立に最も積極的役割を果たしたのは、近代的ブルジョアジーであつた。民族主義と国際主義との交点を見出すに當つて、一番示唆するところが多いのは、近代的な国民国家の成立と発展の過程における民族と国民と階級との同一と分裂との過程である。前述の如く近代国家成立の過程では民族と国民は同じものであり、その主体はブルジョアジーであつた。が一八七〇年前后から大きな変化が生じた。それは国民国家が帝国主義国家への方向を辿り始めたことである。このときから民族主義の主張や運動に一つの重大な転機が起つて、ナショナリズムとインタナショナルイズムの間に烈しい対立が生れてきた。国際主義は国民主義(=民族主義)を持つてはじめて成立する。そうでない国際主義はコスモポリタニズムであり、地盤のない万民主義であるにすぎない。近代的な国際主義が国民国家の成立と民族意識の覚醒を基盤として発達してきたことに注意しなければならない。それを担うものはブルジョアジーである。ところが近代的資本の発展につれて資本そのものの内部で色々の分化と対立が生ずるに伴つて、国際主義と民族主義の間にまず最初の分裂が始まる。ドイツやイギリスの例にみられるように国際主義は民族主義から離れてゐるものではない。国際主義は民族主義の反対物ではない。国際主義は民族主義の否定ではない。国際主義は民族主義の反省された形であり具体化された形であり、より発展した形である。しかし、そうであるからこそ、国際主義と民族主義との悲劇的な分離の素因がそこに胎生する。民族主義の担い手である第三階級が封建的残存勢力に対抗して戦つてゐるが、国際主義と民族主義との間に分離は存しない。けれども国家的民族主義が帝国主義的民族主義に転化し始めるや否や、右の分裂が始まる。ほゞなら、国際的に自由で平等であつた

諸民族の間に、支配と被支配、母国と植民地の区別が生れてくるからである。ナショナリズムはこのとき以来侵略主義の代名詞となり、インタナショナリズムはただそれを美化するための飾り言葉と化するであろう。民族主義と国際主義との交点は階級であり、ブルジョアジーはかつてこの交点をしつかりとつなぎとめていた階級であつたが、今はそうでない。民族主義と国際主義との結合を可能にし、その交点を守り抜く力は、今や第三階級から*第四階級の手に移つてしまつた。愛国心に於ける民族と階級の結合を考えなければならぬ理由は、民族問題の種族的側面が一つの力として作用していることを否定し得ない点にも存するのである」(註22)と述べている。板垣は「戦時においても人民がこの(偏の)「愛国」に對立させねばならぬものは、愛国一般の否定でもなく、コスモポリタニズムでもなく、外国崇拜でもなかつた。なぜなら、愛国とは、日本民族の大多数の幸福と発展を願ふことであり、それは、専政主義者と大金持のたくらむ戦争に反対することにあつたからである。かれらが持出して人民におしつけ注入しようとし居る最悪のものに反対することこそ、眞の愛国だつたのである。このことを忘れた侵略主義反対、国料主義反対は、一種の無国籍主義の誤をもつていて、正しい人民的立場でなく、国際主義の正しい意味にも反する。……愛国の問題を理論的に理解するにあつて大切なことは革命的階級の敵が根本において民族の敵と一致することを理解することにある。……今日日本の人民の眞の愛国の最大の内容は、戦争への道に反対し、平和をまもる斗争によつて平和で独立の祖国をかちとることにあり、このために広汎な民族統一戦線を結集し、世界の強大な平和勢力および民族の平等と独立を尊重する勢力と結びつことにある。民族のすぐれた伝統の尊重や、祖国に対する深い民族的感情は、このもつとも大切な愛国の内容と一致とならなければならぬ。」(註23)。上述の多くの引例によつて明らかになる、愛国心による排外主義とコスモポリタニズムへの逸脱の危険は愛国心そのもののムジユンではなくて、その愛国心を産みだす歴史的環境のムジユンに他ならない。それ故に、この歴史的社会的環境の変化が起らない限り、清水の云ふような「吾人の心がまえ」だけでは、このムジユンは解決され得ないのである。そして帝國主義にとつては民族主義と国際主義と對立する命題であつて絶対に解決し得ない問題である。何故なら、帝國主義による国際的統一は、強力的領土併合や植民地占領の方法によつてのみ行はれ、従つてこれに對して従属国民や植民地大衆は反撥せざるを得ないからである。植民地諸民族が帝國主義の世界支配から離脱することは、今日の段階では、資本主義の崩壊、社会主義の勝利に道を準備する。そして社会主義のもとにおいてのみ、自由意志による諸民族の結合形成が保証され、愛国心に伴う二つの行きすぎのムジユンはそのときはじめで、頭の中でなく、現実的に解決されるであろう。

4

新しい愛国心が裏づけられねばならぬものの一つにヒューマニズムがある。元来この両者はムジユンした存在である。前述の如く、近代社会の成立と共に民族愛すなわち愛国心

が発生したが、ヒューマニズムが産まれるに際して、ハルマニズムに則つて、愛国心に基いて近代化の奥にあらゆる人間主義と呼ぶべきものまで結合した。ヒューマニズムは、ヒューマニズムといふ場合現実とはよつて、現存する愛国心とにおいては、愛国心を超克するためのヒューマニズムやコスモポリタニズムが神聖な人権運動と結びつたものである。他に再登場の恐れがある。また日本国民でなければならぬ一部の特権階級の上に立上るべき人間を作設するためにはならなければならぬ。

5.

今日新しい愛国心
1. 天皇
なけ
2. 排外
る、但人
でな

が発生したが、同時にまるで逆の関係にあつて個々の人間の解放と完成とを要求するヒューマニズムが産み出された。「近世初期にヨーロッパ人が自我の自覚に伴い、自己を形成するに際して、ヘレニズムの含む人間的なもの、現世的なものを内容とする古典『人文』の精神に則つて、人間を新に形成しようといふ運動の思想を人文主義といふ。かかる人文主義に基いて近代人が古典的教養によつて自己の人間性をとり戻すばかりでなく、これによつて更にあらゆる種族からの人間的解放を遂行せんとする運動の思想をヒューマニズム・人間主義と呼ぶ。」(註24)「そして愛国心とヒューマニズムとゆう矛盾した存在が、矛盾したままで結合するときのみその社会の発展は迅速で、科学や藝術が栄えることが出来た。ヒューマニズムは、それが国民的解放の運動と結びつかず、それ自身の論理を追求していく場合現実に対していかなる解決をもたさず、唯問題を頭の中だけで解決することによつて、現実からの逃避を理由がける役割を果たすにすぎない。……理念においては矛盾する愛国心とヒューマニズムは、実践において結合することが出来る。……今日の段階においては、実践におけるこの結合は資本主義の確立と繁栄のためではなく、むしろその超克のための手段となるうとっている。……愛国心に支えられないヒューマニズムがアナキズムやコスモポリタニズムに墮落する危険のあることは向わずとするも、たとえそれが純真な人権擁護の立場を維持し得たとしても、もしそれが解放を願う国民大衆の集団的運動と結びつかないならば、蒼白きインテリの叫びとして、簡単にふみにじられてしまうであろう。他方、ヒューマニズムに支えられない愛国心の復活は、再びかつての復讐主義に再登場の機会を予え、又しても日本国民が、愛国心の名に於て侵略戦争の手先に利用される危険なしとしない。眞のヒューマニストは最も熱烈な愛国者とならなければならず、また日本国民の完全なる独立を願う者は、同時に人民の幸福と人類の平和の眞剣な希求者でなければならぬ。」(註25)「我々の求める現代のヒューマニズムは嘗てのやうな単なる一部の特権的教養階級の教養主義、文化主義ではなくて、民衆を対象としたヒューマニテイの上に立脚しなくてはならない。しかもそれは単なる人間解放の精神ではなくて、新しき人間を作り出すことであるが、そのためには新しき社会の建設が必要であり、この建設のためには更に新しきヒューマニズムは単なる平和主義ではなくて、行動的なものとならなければならぬ。」(註26)

5.

今日新しい愛国心のあり方がさまざまに論議されているが、それらを總括してみると、新しい愛国心は

1. 天皇個人に対する忠義に由来するものではなく、民族に対する愛情に基いたものでなければならぬ。
2. 排外主義であつてはならず、国際愛と結びついたものでなければならぬ。
3. 他人の価値を蔑視するものであつてはならず、ヒューマニズムに裏切られたものでなければならぬ。

4. 反ファシズム的、民主主義的でなければならぬ。(註27)
5. 反帝国主義的でなければならぬ。
6. 「悪党の隠れ場」(註28)であつてはならぬ。

6.

私は餘りにも長く語り過ぎたようだ。殊にインターナショナリズムとコスモポリタニズムの差異に関してはひどい程繰返した。この問題が愛国心の進む方向と密接な関係を持つ重要なものであると考えたからである。亦、私自身且つて大いに迷わされて悩んだ経験があるので、好学者の参考にもと思つたからである。以上を通じて、引例が多い為基だ理解し難い文章になりはしなかつたかという点を恐れるが、なるべく生の材料をとらうとして力を使い等も原文のままにして置いた。私自身の考があまり述べられていないのは引用文が云つてしまつたことを繰返す必要を認めないからである。我々が愛国心を考える場合に最も大切なことは、それが観念論的及非科学的な思考に陥らずに飽くまでも現実と四つに取組んで我々の日常生活そのもの、過去の貴重な体験そのものから導き出されるものでなければ独善のそりを免れ得ないだろうということである。そして我々が自己を信じ、人類を信するならば、我々の愛国心は必然的に、輝く明日の人類の爲のものでなければならぬ。

(1952年 1月 4日)

一愛国について 註

1. 「きけわだつみのこえ」49年10月、東大校組出版部 37ページ
2. 「民主戦線の提唱」社会評論 46年2月 野坂参三
3. 「新しい愛国心」高島善哉、50年10月、弘文堂
4. 「愛国心」清水淺太郎 50年3月 岩波新書
5. 註3書 159 p.
6. 註4書 7 p.
7. 「理想」224号 淡徳三郎 52年1月 理想社 8 p.
8. 註4書 15, 17, 20, p.
9. 「西学用語辞典」出隆、古在田重編、51年5月 青木書店
10. 註9書、5 p.
11. 註7書、大河内一男 6 p
12. 註3書、160 p.
13. 註4書 94 p.
14. 註 ” 107 p.
15. 註9書 144 p.
16. 「西学小辞典」榊侯雄 208 p 48年11月、震書房、
17. 「愛国と国際主義」(「新愛国論」50年2月文理書院) 藤田喜三郎 46→48 p
18. 「愛国の問題について」(「民科研究月報」51年10月) 松村一人 5 p
19. 「戦后日本の社会意識」(「人間の自由と誇りと」51年4月) 理論社 高島善哉 257→258 p
米 体制というのは 資本主義体制、社会主義体制などを指す
20. 「科学と技術」武谷三男、理論社 51年4月 9→10 p.
21. 註17書 55→57 p.

22. 註3書 92-
米、第四階級-
才二階級
だが、近
四階級と
23. 註18書 1→
24. 註16書 加
25. 「愛国心と七
26. 註23書 27
27. 註7書 14
28. ドクター、



R.O. の五月
れて、三宅史平
ト訳文とドイツ
もとより私は
komencanto
私にとつての一
此正が得られる

Moz
Estis en
sia naskur
lecionon a
Kiam E
la unua y
laŭdis la
tiu juna
hejmo.
(狭 文)
Es war
seiner Vo
Der Jü
dem groE

22. 註3書 92 → 114 p.
 * 第四階級 — プロレタリア階級をいう。フランス革命当時、第一階級（国王）、
 第二階級（貴族、僧侶）、第三階級（一般民衆即ブルジョア階級）、しかなかった
 が、近代的な産物であるプロレタリアートは必要以上の何れにも弱さゆいでオ
 四階級と称える。
23. 註18書 1 → 4 p.
 24. 註16書 加藤操一、273 p.
 25. 「愛国心とヒューマニズム」（「人間の自由と誇りと」51年4月）炭塵三部 15 → 21 p.
 26. 註23書 274 p.
 27. 註7書 14 p.
 28. ドクター、ジョンソン「愛国心は悪党の隠れ場」

Mozart kaj Beethoven について



花園凡太郎

R.O. の五月号にエスペラント入門講座として Mozart kaj Beethoven が載せられて、三宅史平先生の懇切な解説と流麗な訳文がついているのを読んで、このエスペラント訳文とドイツ文とを対照してみたいと思った。

もとより私はドイツ語を *de* *be* *de* ぐらいしか知らず、エスペラントの方もまだ *komencanto* に過ぎないのだから、メクラ蛇におぼすのソシロを免れがたいけれども、私にとっての一つの勉強として書いてみようと思つたに過ぎない。諸君からいろいろの御批評が得られるならば幸甚。

Mozart kaj Beethoven.

Estis en la jaro 1787, kiam la juna Beethoven rojagis de sia naskurbo Bonn al Vieno. La 16-jara junulo volis ricevi lecionon de Mozart.

Kiam Beethoven vizitis la mondfaman muzikiston por la unua fojo, li ion ludis al li. Mozarto aŭskultis kaj laŭdis la ludon, sed nur per malvarmaj vortoj. Li pensis: ĉi tiu juna viro ludas ion, kion li diligente lernis en sia hejmo.

(独 X) Mozart und Beethoven

Es war im Jahre 1787, da reiste der junge Beethoven von seiner Vaterstadt Bonn, in der er wohnte, nach Wien.

Der Jüngling, der 16 Jahre alt war, wollte bei Mozart, dem großen Meister der Töne, dessen Name schon weltbe-

rühmt war; Unterricht nehmen.

Als Beethoven ihn das erstemal besuchte, spielte er ihm etwas vor. Mozart hörte zu und lobte sein Spiel, aber nur mit kühlen Worten. Er dachte: „Der junge Mann spielt da etwas, was er zu Hause fleißig eingeübt hat.“

{(G) Es war im Jahre 1787, im = in dem
Estis en la jaro 1787,

ドイツ文では前置詞の in は必ず格をとるのに、Esp. では前置の en に格の支配が無く、年や時、気候などの場合には英語やドイツ語のように文法上の主格 it や es を必要としないことは省略で甚だよろしい。

kiam ----- = da ----- 「-----したその時。」

la juna Beethoven = der junge Beethoven

ドイツ語でも固有名詞に定冠詞をつけないが、定冠詞 + 形容詞 + 固有名詞となると意味が限定される。

naskurbo = die Vaterstadt

de sia naskurb Bonn al vieno = Von seiner Vaterstadt Bonn nach Wien.

in den er wohnt 「そこにかれが住んでいた」は Esp. 文では省かれている。

vojaĝis = reiste (reisen の過去形)(三人称単数の)

La 16-jara junulo = Der Jüngling, der 16 Jahre alt war 十六才の青年。der Jüngling は 12.3才から 20才までの若者。青年のことだと岩波独和辞典には説明してある。

volis = wollte (wollen の過去、望んだ、願った)

la mondfama muzikisto 2 の原文は Mozart, dem großen Meister der Töne, dessen Name schon weltberühmt war と説明的になっている。

ちなみに 1949 年 5 月の R.O 五月号に掲載された初等講座の Esp. 文には La 16-jara junulo volis ricevi lecionon de la mondfama Mozart.

Kiam Beethoven vizitis lin por la unua fojo, li ion ludis al li. となっている。これは初學者のために解し易くするためにわざわざ簡略にされたのかも知れない。

leciono = das Unterricht 教授、授業

イスラントとドイツ語の共通のものをあげてみれば、der Meister は la majstro, der Ton (ーe) は tono, der Name は nomo (英語の name) からかも知れないが -----) などがある。

mondf
固有名詞
の。例えば
ven ('be
Moz
vizit
ricev
por la
li ion
ドイ
奏
す
と
aüsleu
läudi
ludo
sed =
per
数になつて
nur =
pensi
:
:
Strichpu
っているか
di ti
Li lu
Er spiel
dilig
lern
en si
Beeth
lagnabla
gin uzi

mondifama = weltberühmt 「世界に有名な」

固有名詞の人名や地名は人名地名辞書を引いて正確な発音を知る必要があると私は思う。例えばここに出て来るベートーヴェンには二つの発音があると云うことだ。Beethoven (be:thio:fen, be:tho:vən) (1770-1827)

Mozart (mo:tsart) (1756-1791)

viziti = besuchen (訪問する) → besuchte 訪れた。

riceri = rekmen 取る, 掴む, 受取る。

por la unua fojo = das erste mal 「はじめて」 (副詞句)

li ion ludas al li = er spielte ihm etwas vor

かれ (Beethoven) はかれ (Mozart) に何かを演奏してきかせた。

ドイツ語では vorspielen 「演奏してきかせる」 → spielte vor 「演奏してきかせた」となる。この spielen には遊ぶ, 賭博をする, 投機をする, 演奏する (音楽), 演ずる (劇), などの意味があつて ludi と殆んど同じ意味をもつ。

aŭskulti = zuhören 「耳を傾ける」

laŭdi = loben 「ほめる」 lobte 「ほめた」

ludo = das Spiel 「演奏」

sed = aber 「けれども」

per malvarmaj vortoj = mit kühlen Worten ドイツ語では単数になつている「冷い (個々の) 言葉をもつて」

nur = nur 「ただ」 Esp もドイツ語も同形。

pensi = danken → dachte 「考えた」 (過去形)

: dupunkto = ドイツ語でも Doppelpunkt または kolon と言う。

: — 「— ということ」を」と言う意味をあらわす。但しドイツ文の方では (;)

Strichpunkt をつかつている。直接語法だから ----。Esp 文の方は間接語法になつているから (;) をつかつているのだ。これはドイツ文でも同脈である。

ĉi tiu juna viro = der junge Mann

Li ludas ion, kion li diligente lernis en sia hejmo. =

Er spielt etwas, was er eingeübt hat (関係代名詞)

diligente = 认真的

lernis = hat eingeübt 覚えこんだ (練習して)。

en sia hejmo = zu Hause 「うちで」 (副詞句)

Beethoven rimarkis la malvarman laŭdon kaj farigis malagrabla. Li petis la grandan majstron pri-temo; li volis ĝin uzi por libera fantazio.

Kiam Beethoven kolemis, li eiam ludis kun fajro kaj granda pasio. Tiel estis ankaŭ ĉi tiun fojon. Mozart aŭskultis kaj esti profunde emociita. Li turnis sin kaj diris al siaj amikoj, kiuj ankaŭ aŭskultis kun miro: "Atentu ĉi tiun junulon! Iam oni parolos pri li en la mondo"

◆ 1949 の R.O 5月号には

kaj farigis malagrabra kaj estis ofendita となっており, Li turnis sin kaj diris al kelkaj amikoj となっている。この kelkaj amikoj の方は siaj amikoj よりもドイツ文に対しては忠実のようだ。

(独文)

Beethoven bemerkte das kühle Lob und wurde verdrießlich. Er bat den Meister um ein Thema, das er für eine frei Phantasie benutzen wollte.

Wenn Beethoven gereizt war, dann spielte er immer mit Feuer und großer Leidenschaft. So war es auch diesmal. Mozart lauschte und war tief ergriffen. Er drhte sich um

Und er sagte zu einigen Freunden, die auch mit Erstaunen zuhörten: „Auf den gebt acht! Der wird einmal in der Welt von machen.“

(註)

rimarki = bemerken 気がつく、認める。

la malvarman laŭdon = das kühle Lob 冷やかな賞讃を。

イス語の目的格には —nのように名詞に n をつけるが、ドイツ語では 4格をもって素る。

farigis malagrabra = wurde verdrießlich. 腹立たしくなった。腹を立てた。 unde は werden (----になる)の過去。

petis = bat 乞うた bitten 「頼む」の過去。

temo = ein Thema イスプラントの temo はドイツ語の Thema に同じ。

fantazio = eine Phantasie 幻想曲。 Ph = F だからイスプラントの fantazio = Phantasie (fanta'zi:)

li volis ĝin uzi por libera fantazio = das er für freie Phantasie benutzen wollte.

kiam = Wenn. ドイツ語の「----する時に」は Wenn と als がある。 wenn の方は何回も ----する時(習慣)を, als は唯一回きり ----する時に用いられる。イスプラントの kiam にはその区別が無いから簡便だ。

koleri = gereizt (何、誰に対して) 立腹している。

ĉiam = immer 常に、毎度。

kun fajro kaj granda pasio = mit Feuer und großer Leidenschaft.

fajro = Feuer 燃える火、熱烈。

pasio = Leidenschaft 情熱。

Tiel estis ankaŭ ĉi tiun fojon = So war es auch diesmal
ドイツ語では不足の es を用いる。

ĉi tiun fojon = dies mal, こんど (副詞句)

aŭskulti = lauschen 傾聴した。

estis profunde emociita = war tief ergriffen.

Li turnis sin = Er drehte sich um, umdrehen 「廻転させる」 → drehte um (分詞動詞の過去)。

diris = sagte 言った。

al siaj amikoj; al kelkaj amikoj = zu einigen Freunden 二三の友人等に (向って)。

kiuj ankaŭ aŭskultis kun miro = die auch mit Erstaunen
aunen zuhörten

kun miro = mit Erstaunen

Atentu ĉi tiun junulon = Auch den gebt acht! 「あの男に注意したまえ」

iam = einmal 「いつか、他日」

Iam oni parolos pri li en la mondo = der wird einmal in der Welt von sich reden machen. 「あの男 (かれ) は他日世界 (世の中) で、人の噂にのぼるであろう」 (名声をあげるであろう)。こんな場合に 에스ペ란토では、oni を使つて簡単に表現ができるのは、大変便利だと思う。

(21. 5. 1954)

Bedaŭro S-ro Koiĉi (Ne, Kōiti) KATŌ jam foriris el Hokkaido, kaj nun li estas loĝanto en Nagōja. Ofte mi pensis, ke li certe estos bona kaj ĉarma gridanto al ni junuloj, sed tia deziro estis jam vana. Ni nur bedaŭras la foriron de ĉarma esperantisto-----



埋 火 -----(2)

相 沢 治 雄

わびがき

前がきやあとがきがあるのだからわびがきという言葉もあるかも知れない。昨年度17回の水樽の大会でHELの本部を札幌にうつしていただき、LEONTODの一部をHELのために開放していただいた。全道の同志諸君もその後の経過に多大の注目をされておられた事と思うし、私自身としても、心気を新にして大いに活動する決心と、ささやかな自信を帯っていたのである。然るに----あゝ、然るに、実に何一つする事もなしに**狂算**と目をおくつてしまつたのである。全道の同志諸君の御期待を裏切つた罪多大なるものがある。

申訳になるが、(申訳にはならないが、と云つた方が適切かも知れない)昨年度の大会以後は我が生涯の最悪の年と言うべき年であつた。相つづいて起るなやみ、財政的-社会的-仕争の争-並に一あるいは、健康上の、行づまり、信用にかゝわる株友やむを得ない株友出奔争、床にはつかないが病気と同じ不健康といふ株友筆紙につくしがたい悪条件が次から次がらと起つてくる。だれでも一年の間のある時期には、こうした争を至験する事なのであらう。私自身も今まで色々な多くの困難を至験して来たつもりだが、しかし今度はそれ等の悪条件の外に更に明状すべからざる無気力がともなうのである。こんな争は全く言訳にしがすぎない。何とか早くこの状態を脱却して平素のレスペランチストの一人に立ちかへらなければならぬ。メ切間近になつて山本君から原稿の催促を受けた。申訳ない話だが前回の続を書くには、資料の整理も不十分であるが、後日足りぬはおきなうつもりでお許しを願います。

第一回大会の開催とその前後 (二)

さて才一回の全道レスペラント大会は前回に述べた通り大度な

あり反準備
のへられて
せ年ら山部
えて下さつ
村の人達が
んでいるで
大きな旗が
アーチが作
た。村のど
とまり、開
し、登巻舎
をよそつて
産にこれだ
かつた。大
いては、私
旭川の新開
友記事を書

大会の
の大看板
の某氏が
著がその

口の悪い
が、然し大
かも知れな
さて大会
つて山部
が開催され
ので、恐
と想像され

おろしな準備で参加者がる〇〇名位になつても受入出来る体制がととのへられていた。始めての大会に参加する喜びと感激に胸をおどらせ乍ら山部の駅におり立つと、中村久雄君始め山部村の同志が出迎えて下さつたのは当然の事であるが、驚いた事に土地の子供達や、村の人達が手に手に緑屋の川旗を打振り乍ら *Bonvenon!!* とをけんでいるではないか。更に *Unua Kongreso* の文字を染めぬいた大きな旗がひるがえり *Bonvenon!* と書かれた、大きな松の小枝のアーチが作られている。宿舎は大本登竜舎といふ大きな建物であつた。村のどこを歩いても、エス語の案内や、大会のポスターが目にとまり、蘭祥苑を取歩しても、子供達が *Bonantagon* とあいさつし、登竜舎で食事をする時は女中さんが *Bonvole mangu* と御飯をよそつてくれる。大会の準備の大掛りなのにも驚いたが、村の人達にこれだけエス語を普及した中村君の努力には全く敬服の外はなかつた。大本の信者がこの大会に大変な好意と協力をされた事については、私は今もつてすなほな気持ちで感謝している。芦谷省秀氏（旭川の新開記者小口夢計士君の事だと思ふ）は大会参加記に次の趣意記事を書いておられる。

大会の前日駅頭に立てられた案内図（エス語のみにて説明入り）の看板が迎祭に立てられている。……早速気が付いた主催者側の某氏が注意するとエスペラントの工の字も知らない大本の奉仕者がその看板の立て方を引き受けたためだつたといふ……

口の悪い人達は大本はエスペラントを宣伝の道具に使つたといふが、然し大本が力を入れてくれたらつたら至道大会も出来なかつたかも知れないと今でも時々思つている。

さて大会の第一日目は、午前中各地から参集した同志の懇談等あつて山部村小学校で、午前二時に（昭和七年八月五日、金）発会式が開催された。さて前回以来この第一回大会の準備工作を説明したので、恐らく之をよまれた方々は大会の参加者が数百名に上つた事と想像される事と思ふ。少くとも百名位は参集した事とお考之の

争と想うが、実に参加者總數又席参加を含めて21名であつた。この内 F-ino Agnes Alexander, S-ro Jozef Major, 井上照月の三氏は大本で招聘したもの、概であり山部の同志は全部大本信者で4名、大本關係の各地の参加者名、大本に全く無關係の参加者札幌2名、帯広2名、苫小牧1名、函館1名、室蘭から4名の参加者があつたが大本との關係は不明である。したがつて山部以外の参加者は14名であり大本に全く關係がないという同志は7.8名であつた。

行事のあらましは、Saluto、祝詞朗読等の外特別なものを挙げればヨセル、マヨルのレクタ、メトードの説明会(午後4時からの分からは)午後7時からの晚餐会、第2日八月六日(土)8時から山部及其附近の地質學、服部幸雄、歐洲哲學の最近の傾向、ヨセフマヨル、午後8時—Oratoria Kunsido(之は全部地元の同志諸君)午後4時から第1回校議會、議題北海道エスペラント連盟組織について(之についてはHELの誕生として別に記述するつもりである)午後8時 Amuziĝa Vespero、福引(エス文)エス語独唱“麗人の歌、舞踊“荒城の月、”賀持草、その他盛沢山、この中で忘れられたいのは第1回エスペラント大会の歌といふのをマヨルが作り、この夕食参加者がマヨルの指導で練習して歌つた。その曲がどんなのであつたか思い出せない。終にその歌詞を記す。曲は“Should I”といふ英曲の歌によるのと聞いたが細存知の方は細知らせ願いたい。第3日目には聯盟の役員決定、巡回大会開催地の決定等あり、午前10時から山部小学校に於て地元民に対する講演会あり翌八月八日は Postkongreso として芦別山へピクニーコ、その外の催しとしては地元民に対する展覽会、特別公開講演会が持たれた。

(註) エスペラント大会の歌は頁の都合により26 p. 下段へ

外国の
10年の元
がとどい
は Esper
本の lia
リガナを
letero
と書いて
暗記法を
本編で
る文字は
鉄橋は鉄
方ともホ
友のもの
Ŝafo か
まはい
的方法で
であると
カナモ
スタウ
すより
似した
うだつ
カナ
むしろ
blind

カナニッポン語と Esperanto

サツポロ アリマヨシハル

外国の Esperantisto と文通を始めて、しばらくたった頃の昭和10年の元日の朝、Hungarujo の Kovacs Gustav さんから *letero* がとどいた。コワーチ・グスタウさんは中学校の先生だったが、彼は Esperanto を通じてすでにカタカナ、ひらがなを覚えていて、日本の *lia amikino* から送られた主婦の友や婦人倶楽部などはフリガナを頼りに読み、漢字も少しは知っているらしく、わたし宛の *letero* には年月日が漢字で、名前はカタカナでコワーチ・グスタウと書いてあった。Lettero には「漢字は覚えにくいからその科学的暗記法を教えてほしい」と書いてあった。

木偏で書き始める漢字はすべて本に因縁があり、三水のついている文字はみな水に関連があるのなら漢字は科学的な文字といえるが鉄橋は鉄偏でなく、コンクリート橋もコンクリート偏ではない。両方とも木偏なのだから非科学的だ。陸地の多い漢国の漢の字が三水なのもおかしい。女の良いのは「娘¹」と書くからケモノの良いのは *Safo* かと思うと「娘¹」と書いて *Lupo* のことだし、ケモノの王さまはいつも「狂¹」っているわけだ。わたしたち日本人は漢字を科学的方法で覚えるのでなく丸暗記しているのだから通信教授では大変であるという意味の返事に添えて、カナニッポン語で書いた手紙をカナモジタイプライターでたたいて送ったのだった。それ以来、グスタウさんは大のカナモジ礼讃者になつて、日本語は漢字であらわすよりもカナモジで書いた方がその粗筋において Esperanto と類似した点のはつきり判つておもしろいということに考えが及んだようだった。

カナニッポン語というのはカナモジだけで書いてよく判るコトバ、むしろカナモジで書いた方が味の出るコトバのことである。例えば、*blindulo* のことを日本語では「メクラ¹」と云い、漢字日本語では

盲人と書き、それを「モージン」を讀んでゐる。盲人は文字面から判るように目を亡つた人、目のなくなつた人であり、「メクラ」はゴトバの意味から目が暗くなつた人のことで、モージンよりはメクラと呼ぶカナニツボン語の方が味があり、合理的である。

いまRO誌上で *kriptomerio* が *cedro* がと問題になつてゐる「スギ」の本も杉という漢字を見るだけではなぜ「杉」という形にするのかピンと来ない。だがカナニツボン語で「スギノキ」と書いてみると、それがマツスグノキ→スグノキ→スギノキとなつて本の形と名との関係がはつきりする。*Pensi* を「考」と書くよりは「カンガエル」とカナニツボン語で書く方がカンガエル→カムカエル→カミムカエル＝神迎へるとさかのぼつてその成り立ちをさぐつてみると、日本語の *pensi* は「心に神を迎へて、新しい *ideo* を注入してもらふ」と、その順序がはつきり説明されてゐることがよく判り、ものごとを考えることがこのような順序で導人されるものであることは心霊科学がら云つても正しいことは証明されてゐる。

日本語の同音意義 *ponto* (橋), *manĝbastonetoj* (箸), *rando* (端), *peko* (嘴), *ŝtuparo* (階), *ŝtupetaro* (梯), *kolono* (柱) と色々な意味を表わすと同時に読みが同じであるので各語にはハシの意味を持つ同じ部分が含まれてゐるわけである。それはちようど *pulvoro*, *infano*, *silkraupo*, *holoturno* の各語の日本語「こな、こども、かいこ、なまこ」に見るようにみな *malgrandu* の意味を持つ「こ」が含まれてゐるようなもの。この橋、箸、端、嘴、階、梯、柱にみなハツという音と意味が含まれてゐることはこの7つのゴトバに「ある点から別の点をつなぐ物」「そのつなされる場所」ではなく役目をするもの」の意味があるからである。*Ponto* (わたりバシ), *ŝtuparo* (ぎざバシ), *ŝtupetaro* (ハシゴ), *kolono* (ハシら) はそれぞれ *rivero* の両岸を、階下と階上を *tero* と *altaĵo* を、*tero* と *ĉielo* または *tero* と *tegmento* をつなぐものであり、*manĝbastonetoj* (おハシ), *peko* (くちバシ) は食

物の入れ
シッて)
日本語も
が、カナ
含まれて
ナニツボ
バの成立
語尾変化
におもひ
Esper
の表わす
るだがカ
を不定動
vest
man
trin
veget
legi
となつて
Ĉina l
形の上で
ノミモノ
モウと
aĵo を
と區別出
Esper
ボン語の
ja は
のことを
学校の

物の入れものと口の間をつなぐ役をするもののことで、*rando* (ハシっこ) はつながれるその地点のことである。このハシと発音する日本語も漢字で書いたのではお互いのもつ意味のつながりは判らないが、カナで書いてはじめて、なぜお互いにハシという音の同じ部分が含まれているかが判るはず。このように日本語はカナモジで書くカナニツボン語の方が漢字でかく漢字日本語よりは味があるし、コトバの成立ちや変化がはつきりする。またカナモジで書いた日本語の語尾変化は *Esperanto* のように規則立っているものが多いようにおもわれる。

Esperanto では不定動詞の語尾に「*aj*」を付けると、その動詞の表す意味をもつ名詞に変えることは皆さんとつくにご存じのところだがカナニツボン語でも「*aj*」と同じ役目をもつ接尾辞「*モノ*」を不定動詞の語尾に付けると名詞になる。たとえば、

vesti, キルは *vestaĵo*, キモノ
manĝi, タベルは *manĝaĵo*, タベモノ
trinki, ノムは *trinkaĵo*, ノミモノ
vegeti, ウエルは *vegetaĵo*, ウエモノ
legi, ヨムは *legaĵo*, ヨミモノ

となつて *Esperanto* 式に形も読みもうまく行く。ところがこれを *Cima litero* で書くと、着物、食物、飲物、植物、読物となり、形の上では規則正しく見えるが、その読み方はキモノ、シヨクモツ、ノミモノ、シヨクブツ、ヨミモノ、となつて、語尾が「*モノ*」と「*モツ*」と「*ブツ*」の2とおりに読みを統一したいと思つても *manĝaĵo* を「*シヨクブツ*」と発音するわけにはいかない。*vegetaĵo* と区別出来なくなるから。

Esperanto で台所のことを *kuirejo* というがこれがカナニツボン語の *kurija* と発音が似ているのはおもしろい。*kurija* の *ja* は *kuir-ejo* の *ejo* と同じく「そのもののある場所」や「そのことをする家」を示している。

学校の *lernejo* は マナビヤ

理髪店の *barbirejo* は トコヤ
 青果店の *legomvendejo* は アオモノヤ、マオヤ
 菓子司の *kukejo* は オカシヤ
 書 房の *librejo* は ホンヤ
 呉服店の *stofejo* は ゴフクヤ

となつて漢字語で、校、店、司、房といるいるに書かれる語尾が Esperanto では *ejo*¹、カナニツボン語では *ヤ*¹ 1種であらわされるのもまた Esperanto 式に規則変化が出来ておもしろい。もし漢字が巾をかさず日本語が発音を主にしたカナニツボン語として発達して来たなら、炊事場、学校なども *クリヤ*¹ *マナビヤ*¹ のまゝ今でも通用したであろうし、日用語としては使われないうで看板、広告だけに使われる見るだけのコトバ菓子司、青果店、書房という漢字語は出来なかつたであろう。そのうちにトコヤ、ホンヤ、ゴフクヤなども次第に理髪店、書店、呉服店にとつてかわられるにちがいない。漢字はこうして日本語の発音の上の美しさを乱して行くので困つた文字だとおもう。 *vendejo* の「店」をカナニツボン語では *ミセ*¹ または *ミセヤ*¹ と言ひ、コドモたちはそのママゴトコトバで *ウリヤ*¹ と言つてゐる。*ミセ*¹ は *ミセヤ*¹ の略されたものだろうが *ミセヤ*¹ は売り物を多くの人に広くミセる場所や家のこと。ママゴトコトバの *ウリヤ*¹ は *vendejo* をそつくりそのままカナニツボン語訳にした形になり、これまたおもしろいとおもう。

漢字でかく男と女、息子と娘、彦と姫、婿と嫁、翁と媪は Esperanto では *viro* と *virino*, *filo* と *filino*, *belulo* と *belulino*, *bofilo* と *bofilino*, *maljunulo* と *maljunulino* となる。男、息子、彦、婿、翁には形の上では相互に男性を示す目印はないが、女、娘、姫、嫁、媪にはすべてに女が付いていて形の上ではつきり女性を表わすコトバであることが判る。Esperanto の *viro*, *filo*, *belulo*, *bofilo*, *maljunulo* も形の上では男性を表わすことはつきりと示されてはいないが文法上男性名詞になり、接尾辞の *in* が付いておればすべて女性名詞になる。これをカナニ

ツボン語で表
 とヒメ、△コ
 の一部に「コ
 置きかえると
 入れかえても
 コ¹ であり、

ボン語では男
 詞になり、女
 性名詞になる
 界でもすぐれ
 て来るのは唯

Esperant
 イモウトを一
 には不便だと
 類しがないの
 ている。また
 姉、従妹、御
 さんたり話す
 も「イトコ」
 なわけだ。夫
 従妹のイトコ
 の新語とす
 飛躍させて
 トイトコと
 はカナニツ
 うだろう。

また「ク
 ヤミしなさ
 sutelista
 スピト、又

ツボン語で表わすならば、オトコとオトメ、ムスコとムスメ、ヒコとヒメ、ムコとヨメ、オキナとオミナと成つて、男性名詞はコトバの一部に「コ」「キ」を含み、女性名詞はそのコ、キを「メ」「ミ」と置きかえるとわけなく出来るわけだが、ムコとヨメはお互の語尾を入れかえても出来ない。カナニツボン語ではムコは「ムカエタムスコ」であり、ヨメは「ヨンダムスメ」であることを示す。カナニツボン語では男性味の含まれているカキクケコの一文字があれば男性名詞になり、女性味を持つマミムメモの中の一文字が含まれておれば女性名詞になるというように音と形の上ではつきり区別出来るのは世界でもすぐれたコトバだとおもう。しかしこの方則が次第にくずれて来るのは惜しいことだ。

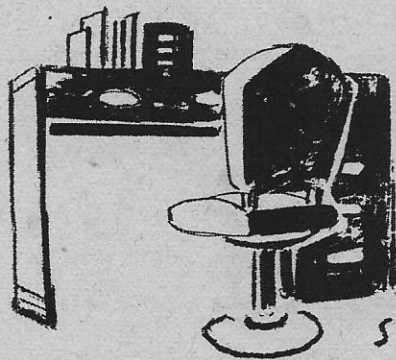
Esperanto にはアニとオトウトを一緒にした fratino, アネとイモウトを一緒にした fratino というコトバしかないので日本人には不便だと思われる。かと思つたらカナニツボン語にはイトコ一種類しかないのに Esperanto には kuzo, kuzino, gekuzoj と分れている。また漢字日本語ではもつと詳しく従兄、従弟、従兄弟、従姉、従妹、従姉妹、従兄弟姉妹とア区分されて便利なようだが、読んだり話すときは、せつかく詳しく書き分けられているこのコトバも「イトコ」ただ一声になつてしまうのだから、便利なようで不便なわけだ。オトコ、オトメ、ムスコ、ムスメの語尾変化にならつて、従弟のイトコを kuzo の意味に使ひ、イトメを kuzino と同じ意味の新語とするならばすばらしいコトバになるのだが。これをもつと飛躍させて従兄と従姉をアイトコとアイトメとし、従弟と従妹をオトイトコとオトイトメとしてはどうだろう。gekuzoj 従兄弟姉妹はカナニツボン語ではイトコとイトメを合せたイトコメとしたらどうだろう。

また「クシヤミする」とが「よくクシヤミする人」だとか「クシヤミしなさい」とが長たらしく言わないで、stelo, steli, stelu, sutelisto, stelanta をそれぞれ又スミ、又スム、又スメ、又スピト、又スソテルと言うのにならつて、クシヤミ、クシヤム、ク

シマメ、クシマビト、クシマンテルというように新しいコトバを作り、これをそれぞれ *terno, terni, ternu, termisto, ternanta* の意味に使うことにしたいものだとして一人で楽しんで見たり、「悲」に対するカナニツボン語「カナシミ」を次のように変化させて

| | | |
|------|------------------|-------------|
| 名詞 | <i>malĝoj-o</i> | カナシ・ミ |
| 形容詞 | <i>malĝoj-a</i> | カナシ・イ |
| 副詞 | <i>malĝoj-e</i> | カナシ・ク |
| 不定動詞 | <i>malĝoj-i</i> | カナシ・ム |
| 現在動詞 | <i>malĝoj-as</i> | カナシ・ミマス |
| 過去動詞 | <i>malĝoj-is</i> | カナシ・ミマシタ |
| 未来動詞 | <i>malĝoj-os</i> | カナシ・ミマシヨウ |
| 仮定動詞 | <i>malĝoj-us</i> | カナシ・ムカモシレナイ |
| 命令動詞 | <i>malĝoj-u</i> | カナシ・メ |

日本語がみな Esperanto 式に規則正しく変化するがのような錯覚にとらわれそうになることがある。しかし日本語をカナモジで書いてカナニツボン語として Esperanto の変化に合わせて見ると、まだ気付かない点にぶつかるかも知れないので、これからもカナニツボン語と Esperanto 語の類似点を探究してみたいと思つている。



Pr
E

S-ro Mike
ni
gi

D-ro Nisja
na
na
re
Sa
d
n
t
a
s
f
d
a
y
y
i

S-ro Mike

D-ro Nis

Pri la Estonteco de Japana

Filozofio : Ĝia Novkreota Formo

— La Dialogo inter Du Foririntaj Filozofoj de
Japanujo : S-ro Kiyosi Miki (三木清氏) kaj
S-ro D-ro Kitarō Nisida (西田幾太郎博士) —

Trad. de Noboru Hajakawa

S-ro Miki — Mi eĉ pensas, ke ankoraŭ ne estus la teorieca filozofio en Japanujo. Tamen se ni havas ĝin, kiel ĝi formiĝis?

D-ro Nisida — Ni trapuŝigu la eŭropan filozofion, ĉar nia filozofio deras havi la teoriecon. En Ĉinujo funkciadis la konfucianismo kaj la Sortodirenarto, tamen ni verŝajne ne porus ilin traini. Same ni ne porus la Budaismon traini, spite de ĝia boneco iom enharanta. Estas necese por nia filozofio, ke la karakteriza pensmaniero, trapuŝiginte la eŭropan filozofion kaj elvirigis, alkaptu nian enkorajon. Do, eŭropmaniere ni studadu. Kaj, ni denove trapuŝigu la eŭropan filozofion. Tiel ni faru komplete. Ni ne ekstudu facilanime la filozofion de S-ro Hussearĉ aŭ S-ro Heidegger, kvankam ili ŝajnas al ni furoraj. Ni, per unua paŝo trastudadu la grekan filozofion ĝisfunde.

S-ro Miki — Nuntempe estas la studantoj de la eŭropa filozofio, kiuj duonvoje sin turnas al la furoraj problemoj pri la japana spirito.

D-ro Nisida — Mi pensas, ke la inklino malbone gridos.

nian staton. Ĝi signifas la returneiron sendube. De kio alvenos la estonta filozofio de Japanujo? Ĝi estas esence la problemo de la fakto. Ankaŭ la filozofio bezonas sin ligitan kun la nuna teorio. Tamen, la japana kulturo ĝis nun ne havas la evoluecon. Kiel ekzemple, estis la utaja Nuntempe, kiam estas tie kafejoj, kiel ni povus evoluigi ĝin? Certe ni ne povas venki novan utajon. Same kiel la teceremonio, kvankam iuj trinkas teon sur seĝo kiel teceremonio. Mi pensas, ke la ĉiuj kulturajoj de pasinte Japanujo komplete evolucis en la formo. Nun estas la epoko, kiam ni kreu ian novan formon por ĉiu da niaj kulturajoj. Kvankam ni povas pli rafinite fari ĉi tiun tablon, ni preskaŭ ne povas krei la novan formon por nia teceremonio. Mi kunaĝu konsili al la japanaj gejunuloj, ke por si mem elkaptu pligrandan problemon.

— S-ro Kiyosi Miki : "Mia Interparolado kun S-ro Prof. Nisida"
(三木清著「西田先生との対話」p.20~22.)

エスペラント通信教育

開講中

- 希望によりいつでも受講できます。
- 通信による説明と添削指導を行います。
- エスペラント学習に要する費用は次の通り

教材費・通信費 500 円
エス和辞典 180 円

小樽市汐見台町一 小樽遊員学校内

エスペラント研究会

Pri Korespondado

- Traduko de Taketoni - Monogatari

Tatuzi Takahasi

Korespondado kun alilandaj gesamideanoj estas tre interesa. Per tio ni povas persone scii kiel estas alilandulaj vivadoj kaj kian personon ili havas t. t. p.

Inter japanaj homoj estas multaj homoj kiuj bone scias pri alilanduloj perede angla lingvo, franca lingvo aŭ aliaj naturaj lingvoj. Sed ĉu ili povas interkorespondi kun fremlanduloj kiuj parolas aliajn lingvojn?

Esperanto estas nura lingvo per kio oni interkomunikas fremlandulojn en tutmondo, kaj pro tio ni povas diri ke la lingvo estas la plej konvena.

Sed se ni ne uzas la konvenan lingvon nia lernado de Esperanto estas tute vana. Do, mi demandas al vi kiel vi uzas la lingvon. Ĝeneralaj japanoj ne facile povas iri al fremlandoj, do multaj en ĉi ne parolas frunte la frunte kun fremlanduloj, kaj nur uzas ĝin por interkorespondi.

Jes, korespondado estas facila kaj bona por uzi nian lingvon kaj inter ni, estas nur malmultaj kiuj ne interkorespondas por ĝi.

Kiel vi korespondas? kelkaj miaj amikoj interŝanĝas i. p. k. - n. en iliaj korespondadoj. Kaj aliaj interkorespondas por profesia studado. Ambaŭ bonaj.

Mia edzino korespondas kun ĉeĥa virino jam de longe kaj do, mi demandis al ŝi, ĉu ŝi havas specialan celon en ŝia korespondado, kaj ŝi respondis ke ŝi havas nenian specialan celon, kaj ke ŝi korespondas nur pro intereso. Kaj intimeco al la virino. Mi pensas ke tio estas ankaŭ bona. Ĝajne virinoj interkonsilas kaj facile amuziĝas en iliaj korespondadoj unu la alian. Sed tio estas pli bona ol krakado apudputa, ĉar tio estas malpli kulpa kaj senĝena por mi mem, ĉe se mia edzino malkone parolus al ŝi, pro ke ili loĝas en malproksimaj

landoj.

Lastatempe korespondantino de mia edzino sendis al ŝi fabellibron ĉeĥan kiu estas tre bele ilustrita kaj lertetradukita en Esperanta.

Fabelo enhavas fantazion de infanoj kaj popolo de la lando kaj multe interesas eĉ maturan homon kaj imstruita fabelo pli multe interesas. Do, mia edzino responde sendis al ŝi japanan fabellibron tradukitan de sia mano.

Mi ankaŭ volas sendi al mia korespondanto japanan fabellibron kaj hodiaŭ mi tradukis kiel ĉi sube nakonton de Taketori el ilustritaj libroj kiuj estas eldonitaj de Kodan-ŝa. La sure metataj nombroj montras bildajn nombrojn sur japane venkitaj libroj. Se vi volas sendi la libron al viaj korespondantoj bonvole eltrance uzu tiun ĉi presadon post via lerta konekto.

第1回北海道エスペラント大会の祝歌としてハックリートヨセフ・マヨール作詞
余興の時全員で合唱した。"Should I"の曲御存知の方は相沢まで御知らせ下さい。

KONGRESA KANTO

En ĉarma val' Originale verkita de Jozef Major
Bela kiel kristal' Kanto laŭ angla melodio "Should I----"
Kunvenis ni por festo -----

En gaja rond'
El la vastega mond'
Kunvenis ni por festo -----

Alvenis jam la atendita hor'
Kaj amo brulas en ĉies kor'

En ĉarma rond'
El la vastega mond'
Kunvenis ni por festo !

KAGU

(Laŭ la
Japanuj

Desegn

Oda.

por inf

(Taketo
kolektas

Jam am
maljunaj

La edzo
por hakan
faras korb
por vendan
ado. Do on
ori"

Kiel leu
al monton

Kiam la
bonajn por
kiu brilas
Intesiĝ
li trovis b
non kiu s

KAGUYA HIME

(La belulino Kaguya)

(Laŭ la plej antikva rakonto en Japanujo. Taketori-Monogatari)

Desegnita kaj pentrita de Kenzō Oda. Moderne japane skribita por infanoj de Jaso Saijoo.

(Taketori" signifas la homon kiu kolektas banbuon. Take" signifas banbuon)

(3)

"Ho, estas beleta infano!" diris li tre goje. "Eble Dio donas al mi la infanon, ĉar tiel longtempe mi plendis pro ke mi ne havas infanon."

Li brakis la infanon kaj revenis hejmen kun ĝi.

Lia edzino ankaŭ tre gojis kaj ili decidis guberni la infanon en malgranda korbo banbua.

(1)

Jam antaŭ multaj jaroj, estis maljunaj geedzoj.

La edzo ĉiutage iras al la monton por hakante kolekti banbuon. Kaj faras korbon kaj korbejon el banbuo por vendante gajni sian koston de virado. Do oni nomas lin kiel "Taketori"

Kiel kutime, hodiaŭ li estas iranta al monton por kolekti banbuon.

(4)

Post la tago, kiam ajn li iras en la banbuaron, li trovis brilantajn banbuojn je trunko. Kaj en la banbuoj ĉiam troviĝas multe da mono.

Tial li fariĝis pli kaj pli riĉa.

(2)

Kiam la maljunulo serĉas banbuojn bonajn por haki, li trovis unu banbuon kiu brilas je ĝia trunko.

Intesigante al ĝi, li hakis ĝin, kaj li trovis beletan kaj malgrandan infanon kiu sidas en la trunko.

(5)

La infano rapide kreskis en tri monatoj ĝis kiam fariĝis mirinde belega virino.

Sia beleco ŝajne lumis eĉ ĉiujn angulojn de la domo de Taketori.

(6)

Taketori petis al eminentaj knuloj por la nomo de sia filino. Kaj ili nomis ŝin kiel "Kagujahime".

La nomo signifas 'belegan junulinon kiu brilas kiel luno'.

Kampanaroj amase kolektigas ĉiutage al la domo de Taketori por vidi tiel belegan filinon, Kagujahime.

(9)

"Nu, mi iros al Horai-monton por serĉi la branĉon de trezora arbo," Kurumamoĉino-Miko diris kaj enŝipiĝis. Sed, post tri tagoj, sekrete revenis en la urbon kaj kolektis multe da lenta artisto por ke ili faru pseŭdan branĉon de trezora arbo.

Post tri jaroj kompletigis tre bela branĉo de trezora arbo, .

(7)

Post ne longe, kvin junuloj, kiuj loĝas en la ĉefurbo, petis al Kagujahime ke ŝi edzinigu kun si:

Ili estas Kuramoĉino-Miko, Ootomono-Mijuki, Isonokamimaro kaj aliaj du homoj kaj ili ĉiuj estas nobeloj.

Kiam la maljunulo Taketori parolis al ŝi pri iliaj petoj, ŝi respondis ke ŝi ne deziras edzinigi.

(10)

Kurumamoĉino-Miko alportigis la branĉon, kiun jam li kompletigis, sur la ŝultroj de liaj subuloj al la domo de Kagujahime.

Ŝi surprizis je alporto de la branĉo, ĉar ŝi ne povis kredi ke ŝi estus alportata, kaj demandis lin, kiel ni ŝajnis la branĉon?"

(8)

Sed tamen la nobeloj ne forlasis dezirojn edziĝi kun ŝi, kaj fine Taketori, konsilante kun Kagujahime, postulis tre malfacilan postulon.

"Mi petas al s-ro Kurumamoĉi ke vi alportu al mi branĉon de trezora arbo en Horai-monto kiu kuzas en orienta maro, kaj al s-ro Ootomono ke vi alportu al mi kvinkoloran jubelon kiu estas ĉe la kolo de drakono, kaj al s-ro Isonokami ke vi alportu al mi cipreon de hirundo. Mi proponas al vi ĉiuj ke mi permesos edziĝi kun mia filino al la homo kiu la plej frue plenumos mian peton," li diris.

Komprenable tiamaniere al la aliaj du nobeloj postulis tiel malfacilan postulon.

(11)

Kurumamoĉino-Miko ĝojis ke li sukcesis mensogi, kaj pli multe mensogante parolis al ŝi kiel li trovis Horai-monton spite de multaj baroj.

Tiam bruiĝis ekster domo, kaj multe da artistoj venis al la vestiblo, kade dirante "Donu al ni monon pro ke ni faris trezoran branĉon."

Tial jam mensogo ne povis esti.

(12)

Ootomono-Mijuki irigis lian subulojn serĉi ĵubelon de dragana kolo, donante multe da mono, sed la subuloj neniam revenas kun multe da mono.

Do li devis mem iri por serĉi ĝin kun aliaj subuloj.

Nun li iras en ŝipiĝi fiere dirante, "Ne timu dragon. Se mi trovas ĝin mi tuj montigos per mia pafarko."

(15)

Isonokami-Marō ordonis al siaj multaj subuloj serĉi cipreon de hirundo. Sed ĝi nenie estas.

Iam iu maljunulo sciigis al li ke ĝi estas naska same kiam hirundo naskas ĝiajn ovojn.

Do li ordonis konstrui altan stangon ĉe granda palaco sur kie estas nesto de hirundo.

(13)

Post nelonge de lia ekiro, venis terura ŝtormo. La ŝipo, en kiu Ootomono-Mijuki enŝipiĝas,

Jam rulegiĝis kaj tranĝeĝis kaj estis renversiĝonta.

Mijuki pensis ke tio okazigis de kolerego de dragono, kaj kriis plorante kun pala vizaĝo, "Ho, pardonu min, dragono, mi jam ne volas vin mortigi."

(16)

Li tenis grandan korbon je la stango per snurego.

Iun tagon hirundo ŝajnis veni por naski ovon, do Isonokami-marō sidiĝis en la korbo kaj ordonis ke la subuloj tiru la snuregon kaj proksimiĝis al la nesto.

Kaj kiam li rapide enigis lian manon en la neston, li tuŝis iun je sia mano, kaj ĝojege kriis de supre "Jen, estas cipreo de hirundo, igu min malsupren!"

(14)

Dum tri tagoj kaj noktoj la ŝipo estis rompe skuita de ventego kaj ondo, kaj je la kvara mateno, ili almenaŭ revenis sur marbordon.

Ootomono Mijuki kiu laciĝis kiel malsanulo, tute konfuzite revenis hejmen.

Kaj jam li forĵetis deziron edziĝi kun Kaguja-Hime.

(17)

Tiam liaj subuloj streĉis rapide la snuregon, sed ili tiom forte streĉis, kiom la snurego tranĉiĝis. Isonokami Marō falis sur teron kun la korbego kaj sveniĝis.

Kiam li rekonsciigis li trovis ekskrementon de hirundo en sia forte premita mano.

Tiamaniere, aliaj du sinjoroj ankau ne povis trovi la aĵojn kiujn Kaguja-Hime petis alporti.

(18)

Fame de belega Kaguja-Hime atingis al la oreloj de imperiestro. Kaj nun tagon la imperiestro vizitis la domon de Kaguja-Hime sur lia revervojo de ĉasado.

Ili miris je la beleco de Kaguja-Hime kaj diris ke li deziras akompani ŝin al lia palaco. Sed ŝi refuzis tion pro ke ŝi ne deziras alveni al la maljunaj geedzoj.

(19)

Venas la kvara printempo de post kiam Kaguja-Hime estis prenita de Taketori. Kaj kia strange, Kaguja-Hime ŝajnas tre malgaja kiam ŝi vidas luman lunon en tiuj ĉi monatoj.

Kaj ŝia malĝojo ŝajnas des pli famigis granda, iu pli proksimiĝas plenluna nokto de aŭtono.

(20)

Kaguja-Hime nun estas tute malordinara, do la maljunuloj maltrankviliĝis kaj demandis la kialon. Ŝi respondis plorante "Mi estis anĝeloku naskiĝis en la urbeĝo en luno. Pro iu kaŭzo, mi venis sur teron kie homoj loĝas, sed en la plenluna nokto la Dio sendos komisiiton de luno por revenigi min, kaj mi nepre devas reveni al la lunon. Pro tio mi ploras -----"

(21)

La maljunulo surprizis je sia diro, kaj sciigis tion al la imperiestro kaj petis "Mi petegas al vi, via mosto, ke mia filino ne foriru al la luno, ĉar mi guvernis ŝin tute kare dum la jaroj.

La imperiestro ankaŭ tre surprizis kaj ordonis al liaj armeoj defendi la domon de Taketori kontraŭ la lunaj komisiitoj.

(22)

Venis la plenluna nokto.

La imperiestro sendis multajn militistojn al la domo de Taketori, kiuj defendis ĉirkaŭ la domo kaj ankaŭ sur la tegmento.

Kaj ili rigardis la ĉielon per seriozaj okuloj kaj pafarko kaj sago preparis. Tiam la maljunulo kaŝis lian filinon en lia plej profunda ĉambro kiun li multe ŝlosiate fermis.

(23)

Estis la noktomezo.

Subite lumegiĝis ĉirkaŭ la domo la luno lumas pli ol dekobla ordinara plenluno.

Kaj de sur la ĉielo multaj bele vestitaj komiistoj kiuj rajdas sur nuboj, proksimiĝis al la tero.

(24)

"Nu, pafu!" la militistoj kiris kaj estis pafanta, sed tiam tremiĝis iliaj korpoj, manoj kaj kruroj; kaj ili jam ne povis eĉ krii.

La ŝambro kiun ili multe ŝlosis jam facile malslosite malfermiĝis.

(27)

Kaguja Hime skribis adiaŭan leteron al la imperiestro kiu zorgis patronis sin. Kaj post kiam ŝi donis ĝin al la maljunulo, ŝi malgaje rajdis en la vetulilon.

(25)

La anĝelaj komisiitoj kiuj portis vetulilon flugeblan en la ĉielo, diris al la maljunulo, "Kaguja-Hime jam devas reveni al la luno kaj ni kore dankas pro ke vi zorgis gvernus sin." kaj al Kaguja Hime, "Nun veni al la luno, rapidiĝu rajdi la vetulilon."

(28)

La bela vetutilo, ĉirkaŭita de multaj anĝelaj komisiitoj, en kiu sidas Kaguja-Hime altiĝis pli kaj pli. La maljunuloj alvokis ŝian nomon kaj rigardis post la nubon en kiu estas la veturiloj starante sur iriaj ped-pintoj. Sed la nubo Baldaŭ malaperiĝis en la bele bluan ĉielon.

(26)

La komisiito vestis flugveston sur Kaguja-Hime, kaj la maljunaj geedzoj alteniĝis al Kaguja-Hime plorante, "Ho mia karuletino, ni ankaŭ deziras iri al la ĉielo kun vi, se vi devas iri tien".

Kaguja-Hime konsilis ilin kaj ankaŭ plorante diris. "Mi ankaŭ malĝojas adiaŭi al vi ambaŭ, sed bonvole pardonu min, rememoru min per miaj vestaĵoj post mia foriro."

サッポロエスぺラント会

1954. 8. 10 現在

- | | | |
|-------------------------|--|------|
| 相 沢 治 雄 (43) | 札幌市上白石町2区 定山溪鉄道電車庫庫助役 | (正) |
| 新 井 静太郎 (26) | 札幌市苗穂町42 日下部金吉方 札幌労働基準監督署 労働基準監督官 | |
| アリマヨシハル (47) | 札幌市北24面9 開発局管轄部 管轄監督官 | (賛助) |
| 石 塚 守 (21) | 札幌市北2面14 開発局管轄部建築課 | (正) |
| 大 木 亮 己 (46) | 札幌市外豊平町定山溪1区48 調達局寮 札幌調達局専業部相償才2課長 | |
| 島 田 藤三郎 (46) | 札幌市伏見町1512 北海道労働基準局 労働基準局監督官 | (賛助) |
| 川 村 未 男 (26) | 札幌市外豊平町ミスマイ3区 高島方 | (療養) |
| 木 村 喜玉治 (44) | 札幌市伏見町337 (南16面17) 札幌中央放送局業務課副課長 | |
| 桐 生 有 保 (40) | 札幌市藻岩下376 開発局管轄部建築積算係長 | (正) |
| 奥 玉 広 夫 (27) | 札幌市北12東2 西村方 北海道庁地方課 | (正) |
| 坂 下 清 一 (45) | 札幌市北1東9 北工電気株式会社社長 | (正) |
| 菅 井 慶 一 (28) | 札幌市南26面10 自衛庁 自衛庁札幌建設部建築課 | (学生) |
| 瀧 崎 昌 久 (35) | 札幌市南3西21 北海道学芸大学助教授 | (正) |
| 瀬 川 良 弘 (35) | 札幌市南21面14 北海道学芸大学教官 | (正) |
| 高 木 貞 夫 (22) | 札幌市南13面13 吉村方 北大農学部農業生物学科学生 | (学生) |
| 高 木 敏 子 (27) | 札幌市南1西14 無 限 | |

- 高橋 要一 (41) 札幌市大通東8-1
北海道ヒラノ荷株式会社経理課
- 高屋 宣子 (23) 札幌市北20西3
Yoshiko 札幌郵政局建築部
- 西 忠雄 (42) 札幌市北12西2
北大工学部建築工学部教授
- 仁保 武親 (20) 札幌市南14西8
北大一般教養部学生 (学生)
- ~~早坂 基 (28)~~ 札幌市南之西25
札幌郵政局建築部
- 森谷 秀雄 (39) 札幌市南7西15
開発局官房会計課 (学生)
- 山路 聡峰 (42) 札幌市北17東4
札幌鉄道病院給食部
- 利崎 林之函 (38) 札幌市南9西8
国鉄琴似駅助役
- 渡辺 由美 (22) 札幌市南4西5札幌別院内
札幌薬学園被服研究部学生
- 滝 一郎 (27) 美瑛市南美瑛町三井下4條4丁目右1号
三井鉱山美瑛鉱業所経理課
- 岡本 義雄 (48) 空知郡三笠町立幾春別小学校
幾春別小学校校長

(註) (正) とあるは学会正会員

(賛助) 同学会賛助会員

(学生) 同学会学生会員

(療養) 同学会療養会員

— 第18回北海道工スプラント大会近づく —

Karaj Gesamideanoj !

Nia ĝojplena Jar-Kunveno tre proksimiĝis al ni. La tago kaj enhavo de la kongreso estas jam decidita. La ditalo estas jene -----

日 時 9月23日 (秋分の日)
午前10時 — 午後3時 時間勵行

会 場 札幌市 町村会館 (北4条西6丁目)

会 費 参加者 (kotizo al partoprenanto)
250 jenojn

欠席参加者 (kotizo al neaperita kamarado
— tamen jesanto de tiu kongreso)
100 jenojn

| | | |
|--------------------|----------|---------------|
| (会費 250 円の内訳—見込) | | 大会の収支は例年支出超過と |
| teo k kukoj | 50 jenoj | なることが多い概であり、た |
| tagmanĝaĵo | 100 " | いがいは寄附などによつて破 |
| foto | 30 " | 綻をまぬがれているものの概 |
| eja kosto | 20 " | に見うけられます。よろしく |
| reporto | 40 " | 御協力下さい。 |
| sendaĵo de reporto | 10 | |

申込み先 札幌市北24,西9,

(Sumo) 250 jenoj s-ro アリマヨシハル ^

LEONTODO N-ro 10

| | |
|-------|--------------------------------------|
| 発 行 | 1954年9月5日 |
| 編集・印刷 | 北海道札幌市庄ノ江町9の8 山本昭二郎 |
| 発行人 | 札幌工スプラント協会 北海道札幌市花園町東3の11 山賀眼科医院内 |
| 会 費 | 40 jenoj (他に送料10円) |